

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

## 江戸の大名屋敷の考古学的研究

Archaeological Study of *Daimyo* Residences  
in Early Modern City *Edo*

2017年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

追川 吉生

Oikawa, Yoshio



本論文は、近世都市江戸の大名屋敷に関する考古学的研究である。この研究では近世考古学の成果、殊に江戸の大名屋敷跡遺跡の調査成果を主な分析対象とする。

大名屋敷に関する研究は1910年代から行われているが、歴史学の研究対象としては注目されてきたとは言い難い研究分野だった。1980年代半ば以降になって、東京都心部で江戸時代の遺跡が埋蔵文化財の調査対象になると、考古学による大名屋敷跡遺跡の研究が急速に進展するとともに、歴史学でも大名屋敷の空間構造や、大名屋敷と周辺社会との関係などに関する研究が行われるようになった。

大名屋敷跡遺跡の調査と研究は、大藩の上屋敷を中心に展開してきた。しかし今日では、小・中藩の大名屋敷や郊外の下屋敷まで調査事例が拡大し、その多様性が明らかになりつつある。そこで大名屋敷跡遺跡のあり方を、考古学を中心とした学際的研究の視点から検討し、大名屋敷の多様性の背景にある遺跡の構造を解明することが本論文の目的である。

本論文の研究は、(1) 屋敷境遺構の形態分類に基づく、大名屋敷外郭部の土地利用状況と景観の変遷過程の解明、(2) 大名屋敷内の区画遺構のあり方と、大名屋敷の空間構成に反映された階層性の検討、(3) 大名屋敷内における生産活動の解明、(4) 大名屋敷の変遷と、その歴史的背景の解明、の4点に集約できる。各研究の成果は以下の通りである。

(1) 初期の大名屋敷(1590年代～1650年代)の屋敷境遺構は素掘りの溝を中心とする。これは屋敷境の施設として塀や柵、生垣など比較的簡易なものが推測される。次いで柱穴や土坑列からなる屋敷境遺構が出現する。これらは塀や柵が推測される。また1630年代になると低地の大名屋敷を中心に堀が構築されるようになる。

屋敷境遺構周辺の遺構分布から、大名屋敷外郭部の土地利用の実態を検討すると、表長屋(長屋型表長屋)を設ける屋敷、ゴミの埋土処分地とする屋敷、積極的な土地利用がみられない屋敷などが混在していることが明らかになった。こうした初期の大名屋敷の多様な景観は、空間構成の型式化が未だなされておらず、個々の大名家によって屋敷の利用状況が多様だった状況を反映したものと考えられる。

江戸城に隣接する大名小路などの大名屋敷跡遺跡では、1620年代から下水道を兼ねる石組溝による屋敷境が増加する。これによって護岸の石垣上に礎石を据えた表長屋(長屋塀型表長屋)が屋敷を囲むという景観が成立する。ただし石組溝による屋敷境の出現と、それに伴う長屋塀型表長屋の構築は、江戸の大名屋敷に斉一的に出現したわけではない。江戸城から3kmほど離れた加賀藩本郷邸では天和の大火(1682年/天和2)頃、4kmほど離れた尾張藩市谷邸では明暦の大火(1657年/明暦3)後に出現する。こうした時期差を生じせしめた要因の一つとして、江戸の下水道整備の進捗が考えられる。

以上にみた大名屋敷の景観の変遷は、府内の大名屋敷を対象としたものである。江戸郊外の下屋敷跡遺跡の屋敷境遺構のあり方はこれと異なり、屋敷境として空堀を検出することが多い。下屋敷に堀と土塁を構築することが幕府の指示であることを示す史料は存在するが、下屋敷跡遺跡の調査例が少ないこともあって、その実態や歴史的背景は不明である。

(2) 大名屋敷の空間構成は、屋敷の中核で藩主の居住空間がある「御殿空間」と、藩士の居住空間や屋敷内の役務を担う部署が配置された「詰人空間」の二つの空間からなりたっており、

両者には明確な階層性が認められる<sup>1)</sup>。これは主に藩邸絵図の分析に基づいた検討であり、空間を区画した施設の実態を明らかにするためには考古学が有効である。

御殿空間と詰人空間の境界には、主に土坑列による塀が区画施設として構築されており、両者の間には高低差が設けられていたことが区画遺構の分析によって明らかとなった。区画遺構の構築場所の検討から、区画遺構には藩主や藩主一族の居住空間を遮蔽するという機能を有していたことも明らかになった。大名屋敷内の御殿空間と詰人空間は、こうした区画施設によって家中の身分秩序を反映した階層性が具象化されていたのである。ただし区画遺構による高低差が認められるのは台地上の大名屋敷跡遺跡で、現在までのところ低地の大名屋敷跡遺跡に類例はない。

(3) 大名屋敷跡遺跡の植物栽培に関連する遺構と、金属加工に関連する遺構および遺物の分析から、大名屋敷内の生産活動について考察した。

植物栽培遺構のあり方と検出地が帰属する利用空間の検討から、大名屋敷の植物栽培を3つに類型化した。そのうち詰人空間における栽培活動には、勤番長屋に隣接する植物栽培類型B類と、空闲地で検出する同C類とがある。植物栽培類型B類は藩士たちが個人的に行った栽培活動に、同C類は藩士のほか、出入の百姓らが生産に携わっていた栽培活動に位置付けた。

金属加工に関連する遺構・遺物のあり方は、金属加工遺構・遺物A類と同B類の二つの類型を提示した。金属加工遺構・遺物A類は府内の大名屋敷における金属加工に、同B類は郊外の大名屋敷で行われた金属加工に位置付けた。金属加工遺構・遺物A類の検出場所と絵図との照合を試みた結果、詰人空間内でも役務を担う施設付近にあたることが明らかになった。また遺構の規模が比較的小さいことから、金属加工遺構・遺物A類の金属加工は、藩邸内の種々の役務に使用した道具類の加工や修繕に伴うものであることが推測される。金属加工遺構・遺物B類は、多量の鉄滓や鉛塊などが出土することから大規模な金属加工が推測される。しかし現時点では、それに関連する遺構は未検出のため詳細は不明である。

歴史学での大名屋敷研究では等閑に付されてきた大名屋敷における生産活動という、大名屋敷の新たな研究視点を提示したと考える。

(4) 以上の成果をもとに、本論文では大名屋敷跡遺跡の8つの類型を提示し、大名屋敷の歴史的変遷を考察した。

類型1は最初期の大名屋敷で、御殿空間では饗応に伴う宴会は行われていない。1620年代以降になると宴会に関連する遺物を伴う類型2、類型5(栽培活動あり)の大名屋敷が出現する(ただしその出現は非斉一的である)。類型2は17世紀後半までに屋敷の周囲を長屋塀が囲む類型3の大名屋敷に代替される。17世紀後半(明暦の大火後)以降は、避災地としての下屋敷や抱屋敷が増加することで、饗応は行われず栽培活動が中心となる類型6の大名屋敷も加わる。この類型3、5、6の大名屋敷のあり方が以後、幕末まで継続する。つまり江戸の大名屋敷は、1590年(天正18)の家康の江戸入府によって出現し、17世紀半ばに景観的規制や屋敷内の諸活動によって3つのあり方として完成し、幕末まで展開したと捉えられる。

今後は類型4(将軍別邸としての大名屋敷)や類型7(大規模な金属加工などの生産活動が行われた大名屋敷)、調査例のない類型8(幕藩営軍事工業が行われた大名屋敷)のあり方を更に検討し、本論文が提示した大名屋敷の多様性の実態の解明を進めるとともに、大名屋敷の諸活動と周辺社会との関係についても明らかにすることが求められる。

1 吉田伸之 1988 「近世の城下町・江戸から金沢へ」『週刊朝日百科・日本の歴史・別冊・歴史の読みかた』2